

連 載

がん予防学雑話(25) 古い時代のがん

青木 國雄

がん予防について専門家が危機意識をもって取り上げたのは19世紀末の欧州であり、実践的な活動を始めたのは第二次世界大戦終了後と言ってもよい。がんは長い間、原因が不明で死に至る病として恐れられたが、古い時代から先人はがん患者をきめ細かく観察し、その病態特性を記述し、治療、予防法についてのいろいろな試みや、病因仮説を提示していた。これはマラリヤとか結核など同様古い時代にあったわけで、人は何時の時代でも未知に挑戦していたことがわかる。手元にある古代腫瘍学についての文献はあまり多くはないが、2000年以上も前からがんについての興味ある記録があるのでそれについて、ここで手短かに紹介したい。

がんという病の生物学的特性、疫学像から考えれば、がんは人類、いや生物と共にあったといっても大きな間違いではない。ただ昔はがん年齢まで生存する人々の割合が低かったので大きな社会問題になることは稀だったと思われる。

最近の化石の研究では、ダイノサウに骨腫とか脊椎の血管腫が認められたとか、古代の洞窟熊の大腿骨肉腫の知見が報告されている。人ではエジプト古代王朝期、約5000年前のミイラ数万体の検査で、3例の骨肉腫、3例前後の鼻咽頭がんが発見されたという。X線検査でみると、上顎骨、口蓋、翼状突起などに病的破壊があった。当時の東アフリカですでに鼻咽頭癌が多発していたということを示唆する興味深い知見と書かれてある。ペルーのインカでもミイラは多く発見されているが、約2400年前のミイラに、骨肉腫のほかメラノーマと思われる病変があり、頭蓋に転移巣が数多く点在している写真が公開されている。

がん患者についての記述はエジプトのパピルスにある。エーベルが買い取ったパピルス（内科書といわれる）が解読されているが、それによると、紀元前1800年、イムホテプという医師が脂肪腫を記載しており、これは触診で診

断でき、治療しなさいと言っている。また手足の腫瘍の記載があり、外因によるもの以外に、Kaposi肉腫と思われる記録がある。エドウィン・スミスのもっているパピルス（外科書といわれる）には乳腺腫瘍の記載があり、この腫瘍は冷たく、熱を持たず、肉芽もなく、切開しても液体はない。乳首からの分泌もない。こうした腫瘍は治療法がなく予後が悪いとしている。子宮癌についてはカフン（エジプト）で見つかったパピルスに症状と特異な臭気が書かれてあるという。体の表面に近い臓器、組織の腫瘍の観察はその他の地域でも観察されていた。

古代インドの医学もかなり高い水準の内容をもっている。釈迦時代（BC 500頃）の医方明とか、金光明最勝王経などには総合的な医療（薬物、食療法、精神療法など）や養生法が示されている。病気の分類は症状を中心としているので、炎症とか外因による病の他ははっきりしない。若年死亡が多かったためか、腫瘍についての記載はほとんどない。矢野道雄訳インドの医学概論は古代インドの医学書、チャラカ・サンヒターの訳書である。これには、当時多発していた病の紹介のなかで、腫瘍は何種類あるかとか、三種の腫れ物という項がある。また腫れ物には外因性と内因性があり、前者は外傷や炎症由来であるが、後者のなかには、発生しにくいが治りにくい腫瘍がある。外見で見ると、色は白色・青白色などで、鈍重感があり、位置を変えず、はれて層が厚い感じと書かれてある。また男女とも陰部の腫瘍は恐ろしく、続発症状があり予後が悪いとか、甲状腺腫の病名もみえる。しかし炎症と腫瘍の区別ははっきりせず、また良性、悪性の区別も記載がない。当時のインド医学の病因学説は、人の体は、ピッタ、ウバータ、カパの3要素から成り立ち、その過剰や不足で調和が乱れると病になる。これにドーシャ（病素）という概念を導入して病状を説明している。こうした体の構成要素の乱れは生活習慣からくるものとして、治療は食養生と薬物療法が多く記載されている。精神衛生対策を重視しているのも注目される。全体として当時としては立派な医学全書と感心している。

中国の古代医学については黄帝内経などすばらしい遺産があるが、病気の分類についてはそれほど系統的には記述はない。特に腫瘍関係の記載は乏しい。古い言い伝えをまとめたと思われる山海経には腫れ物という言葉がでてくる。漢の時代の馬王堆（マオウツイ）の遺跡からでた医薬書には五十二病方が書かれてあり、その中に腫瘍という項がある。同じ頃編集された神農本草経には甲状腺腫（えい疽、エイタン）の他、癰腫（ヨウシュ）が書かれてあるが、腫瘍

としての特性は明確に記載されていない。ゆっくり進行する乳癌らしき病に緩疸という病名がある。癌と言う文字が登場するのはさらに後のようである。

悪性腫瘍、がんが比較的今日に近い表現で記載されたのは、ペリクレス時代（BC495-429）のギリシャである。足を上げたカニに由来するカルシノス、カンクル、カンセルなどという用語はアスクレピオスの神官（BC700）まで遡るといわれる。

乳房にみられるこの病は自然には治らぬ腫れ物とされた。ヘロドトス（BC484-425）は著書、歴史のなかでペルシャ大王、ダレイオス（BC558-486）の妻アトッサについて記載している。アトッサの乳房にできた腫瘍はだんだん大きくなりやがて口を開いたので隠しおおせぬようになり、彼女はその治療のためデモケデス呼んだ。デモケデスはイタリア南部のクロトンの医師であったが、ギリシャで医師として名を挙げ、やがてサモス島のポリュクラテス王の侍医となった。王が戦いに敗れたので、捕虜となりペルシャにつれてこられ奴隷となった。彼はいろいろな病人を治したので、その評判をきいて難治で苦しんでいたダレイオス大王に呼び出され、彼の足首の脱臼を治した。褒美をもらい奴隷から解放され、後宮にも出入りを許されていた。アトッサは彼に病の治療を乞うたのである。彼はアトッサに、もしこの病を治したら、決して不遜ではないが私の願いも聞いてほしいとことわって治療をはじめた。幸い彼はアトッサの乳房の病を治す事が出来た。彼の願いはダレイオスがギリシャと戦争はじめてほしいということであった。その機会があれば、ギリシャをよく知っている彼は現状調査かたがた帰国できると思ったからである。約束通りアトッサは大王に示唆的にささやいて王をその気にさせたという。これが長いペルシャとギリシャの戦争になったといわれている。最近の研究ではアトッサの腫瘍はがんではなくて膿瘍だったので治癒したとのことである。

ギリシャ医学はやはりヒポクラテス（BC460-370）が頂点にある。ヒポクラテスは実に注意深く多くの病気を観察、記述し、治療法を述べているが、当時がんの頻度が低かったためかがんの患者はあまりみていなかったようである。しかし数少ない観察の記述は極めて鋭い。後でまとめられたヒポクラテス全集の中、“婦人の病について”の中でこう書いている。“乳房の中には、大小いくつかの腫瘤があり、化膿はせず、固くなり、そしてがんが形成される。やがて体調は悪くなり、痛みを覚え、痛みは首からさらに肩甲部に上がってくる。乳首はひからび、体はやせ、やがて死亡する。また、“疫病について”の章

には“乳首から血の混じった分泌液がでて、それが出なくなったとき患者は死亡した”とある。子宮の腫瘍についてもいくつかの型を記載しており、分類として良性の腫瘍、スキルス、悪性腫瘍の3型を分類し、スキルスは良性で治療可能としている。胃癌や喉頭癌の記載もある。

彼は病気の発生機序として4体液説を唱えていた。ヒポクラテス以前からあった考え方をまとめたと思われるが、体は粘液（脳からの分泌物）、血液（心臓から）、黄胆汁（肝臓から）および黒胆汁（脾臓から）から成り立ち、体液の過剰や欠乏などによりその調和が破れれば病になる。がんは黒胆汁の過剰によるものであり、過剰の黒胆汁がうまく消化されれば腫瘍があっても消褪する。消化されず生のままであると慢性となり、やがて死亡するという。過剰や欠乏は食生活と関係するとして、食養生の重要性を強調している。黒胆汁はメランコリー病の原因でもあるという。この四大体液説は欧州で長く信奉されたので、病気の本体の究明をかなり遅らせたとも言われる。

ローマは一大文化圏を形成し、医学もギリシャの文化を受け継いでレベルの高いものであったと思われるが、腫瘍学の進歩はそれほどでもなかった。患者が少なかったためであろう。アウレウス・コルネリウス・ケルスス（BC30—AD64?）はヒポクラテスの学問をうけついで代表的な医師であった。彼は“医術について”という著書をあらわし、その中でがんについてもわずかばかり記載している。彼は隠れた癌の存在について強調しており、こうしたがんは放置しておくより仕方がないが、治療法が不適であると悪化し、生命が危険になるとしている。彼は炎症の特徴として、有名な **Rubor**（赤い）、**Color**（熱がある）、**Dolor**（痛い）、**Tumor**（腫れる）の学説を唱えた人である。結核を初めて記載したのもケルススといわれる。

クラウディウス・ガレヌス（AD130—200）はローマ時代の医学の頂点に立った人であり、皇帝マルクス・アウレリウスの侍医でもあった。小アジアのペルガモンの建築家の子として生まれ、ギリシャで教育を受け、ローマにわたり、医師として令名をはせた。彼の著書は極めて多く、解剖、生理、病理、診断、治療と多岐にわたっている。四体液説を基に、特異な病理理論を発展させ、長く後生の規範となった。腫瘍については、有名な腫瘍論の中で、腫瘍には自然に従う腫瘍（ツモレス セコンドウム ナツラム）、自然を超える腫瘍（ツモレス スプラ ナツラム）、自然に反する腫瘍（ツモレス プラエテル ナツラム）に3分類している。この中、自然に反する腫瘍に良性と悪性がある。悪性の腫

瘍も初期の間は無症状、無痛であるが、大きくなると疼痛も現れる。黒胆汁が過剰となり、例えば乳房とか子宮でせき止められて排出しないとがんになるという。男の陰部の腫瘍も予後はわるい。治療は局所薬、薬草内服、焼却、切除手術などとしているが、後二者はあまりすすめていないと言う。ケルススは初期には焼きごて、焼灼をすすめていたが、治癒効果は少ないとも言っていた。

古代からローマ時代にかけて がんについてもいろいろな努力があったが、若年死亡の多い時代であり、また癌年齢人口が増加した地域もあったであろうがその時代の期間は短く、得られた成果は残されていない。腫瘍学が発展する機会や背景に乏しかったといえよう。

(名古屋大学名誉教授・愛知県がんセンター名誉総長)